

子育て期における友人関係の葛藤

藤 後 悦 子¹⁾・井 梅 由美子¹⁾・大 橋 恵¹⁾・川 田 裕次郎²⁾

¹⁾ 東京未来大学こども心理学部こども心理専攻

²⁾ 東京未来大学こども心理学部こども保育・教育専攻

(2014年11月26日受理)

キーワード：友人関係、子育て期、葛藤

1. 本研究の目的

近年子育て期の友人関係である「ママ友」は、多くのメディアで取り上げられている。しかし学術的には、成人期以降の友人関係の研究は少なく（中山・池田, 2014）、子育て期において実際にどのような友人関係が展開されているのか、その実態はあまり明らかになっていない。そこで本研究は、子育て期の友人関係としてママ友を取り上げその特徴や葛藤を概観することを目的とする。併せて常に親の関与が求められ、かつ親同士の前で子どもの優劣が明確になることで、葛藤が表面化しやすい地域スポーツについて取り上げることとする。

2. 子育て期の友人関係

結婚後の人間関係は、従来の家族関係に加え、夫婦関係、配偶者の家族や親戚関係など新たな関係性構築が求められる。さらに子育てが開始されると、子どもを通じた親同士の関係や子どもが関わる大人との関係（保育園・幼稚園や学校の先生、習い事の先生、保健師、病院の先生等）、子どもの友だちやその親達との関係なども加わっていく。子育て期の人間関係を大別すると、配偶者の家族や親戚をも含んだ血縁関係、職場や地域の人との関係、そして友人関係に分けられる。

友人関係とは、幼少期から発達年齢に応じて形成されていく。具体的には、学校など教育場面を通じた友人関係、塾や習い事や趣味などを通じた友人関係、アルバイトや職場の仕事など役割を通じた友人関係などがあり、これらは子育て期も継続される。それでは、子育て期の友人関係とは、それ以前の友人関係とどのように異なるのであろうか。

子育て期の友人関係には、親自身が今までに個人として形成してきた友人関係と子どもを通じた親同士の友人関係がある。子どもを通じた友人関係とは、女性ではいわゆる「ママ友」と呼ばれ「育児中の母親同士の友人関係」（中山・池田, 2014）と定義される。子どもを通じた親同士の関係は、出産前後の育児サークル、病院や保健センターの親子教室、子育て支援センターのひろば事業など地域の子育て支援などをきっかけとして作られることが多い。その後多くの場合保育園・幼稚園、学校、習い事など子どもの教育機会をきっかけとして親の友人関係が広がっていく。特に幼少期や学童期は、保育園や幼稚園、習い事の送迎には親が欠かせない。例えば、幼稚園のバスを待つ時間、プールやテニスなどのスポーツ教室やバレエや音楽教室などの習い事を待つ時間、地域スポーツのサッカーや野球などの当番や試合観戦の時間などを通して自然と親同士の相互作用が生まれ友人関係へと発展する。このような親同

士の関係は、男性も女性も同様に発生するはずであるが、仕事の形態や性役割分業の影響から、送迎や当番は母親が担うことが多く、子どもを通した親同士の友人関係は、男性よりも女性の方が広く展開されている。

さて子育て期の友人関係を代表するママ友は、学生時代のように自身とほぼ年代ではなく、子どもの年齢を基準とした出会いとなる。厚生労働省の平成24年人口動態統計（厚生労働省、2013）によると、第1子の出生年齢の範囲は、14歳以下から50歳以上までであり、親同士の年齢は、最大で約40歳もの差が生じる可能性がある。平成24年度の合計特殊出生率は1.41であることを考えると、1人または2人の子どもの母親という立場で、10代から50代前後までの女性がママ友となるのである。つまり、ママ友の中には、青年期後半の人、成人期の人、中年期の人など異なる発達期の人が含まれるのである。

このようなママ友の関係は、育児のサポート資源としてポジティブに機能する場合もあれば、ママ友同士のトラブルなどネガティブに機能する場合もある。ここでは初めにママ友のポジティブな側面を概観し、続いてネガティブな側面について述べていく。

はじめにポジティブな側面についてだが、東京都の幼稚園児及び小学校1、2年生の保護者589名を対象とした調査（ベネッセ未来教育センター、2005）によると、「子どものクラスのお母さん」を「深刻な問題でなければ子どものことを話せる相手」と考えている母親は41.8%と最も多く、「かなり踏み込んで相談できる相手」と合わせると70.8%が示された。このようにママ友は、子育て期においてサポートティブな友人関係としての側面を有している。それでは、実際にどのような相談をママ友に行うのであろうか。子育て中の相談相手と相談内容について場面想定法を用いて検討した藤後・大橋・岩崎（2013）では、しつけ、習い事、学習、家族、生活、友人関係、学校関係の7つの場面の問題に対して、夫、親、ママ友、先生、本やネット、スクールカウンセラー（以下SC）、SC以外の専門家、自分と子どもとの解決という8つの相談相手のどれを選択するかを調べた。

その結果、ほぼすべての場面で夫を相談相手としている人が最多だったが、相談内容の中でもおねしょ（生活）や部活のいじめ（学校）、夫について（家族）、コーチについて（習い事）、漢字習得について（学習）などは、夫に続いてママ友を相談相手とする割合が高かった。このように身近な困りごとは、ママ友に相談することで情報を得たり、愚痴をこぼすことで気分を晴らしたりしており、ママ友は、子育て期において重要なサポート資源として機能していることが明らかになった。

一方で、子育て期の女性にとってママ友の関係をうまく築けない場合は強い葛藤や緊張が生じることとなる。ママ友は、子どもを介した関係であるからこそ、トラブルが生じた場合に「距離をとる」ことが難しい。また普段からそれほど親同士の相性が良くないとしても子ども同士の仲が良ければ、お互いの家を行き来したり、一緒に遊びに行ったりすることも多くなる。その中で生じるママ友とのトラブル経験に関してキャリアママ（2011）のWeb調査によると、「ママ友でトラブルになったことがある人」という質問に対して279人中35.5%が「はい」と回答している。その内容は、「子どものことで注意を促したら逆切れされた」「身に覚えのないことを言いふらされた」など子どもがらみのトラブルを挙げる人が多かった。若本（2001）は、「女性は、他人との関係性の中で生きる傾向があるため、人間観や様態に個人差が生じにくい」と指摘している。つまり、育った背景は異なるもののお互い子育て期には子どもを通した共通の時間を過ごす中で同調性を生みやすく個人差が表面化しにくいのであろう。言い換えるならば、異なる背景であるにも関わらず強い同調性が求められるために、対人関係に葛藤が生じるのかもしれない。

3. ママ友と葛藤が生じる背景

ママ友と葛藤が生じる要因は多くあると考えられるが、ここでは現代の子育て状況を分析している三沢（2009）を参考に①育った時代による価値観要因、②現在の経済的格差要因、③パーソナリティ要因、④子どもの特性要因の4つについて述べていく。そ

それぞれの要因においては、基本的に各要因に関連する研究領域で頻繁に引用されている主要な論文を著者らの合意で選出して、時代背景に沿う形で配列を試みた。

① 育った時代による価値観要因

前述の通り、母親という同じ立場であっても、その年齢は10代から50代までと幅広い。そもそも生まれ育った価値観や社会背景が異なり、三沢（2009）は1960年代生まれの親から子育ては大きく変わったと指摘する。高度経済成長を通して都市化、核家族化が促進されることとなり、これに伴い夫婦で協力して家事育児を行っていた体制から、「父親は外で仕事、母親は家で家事・育児」という夫婦分業へと移行していくこととなった。つまり1960年以前は、夫婦の家業を中心として多くの人が子育てにかかわっていたが、1960年代以降は核家族で特に母親を中心とした子育てに移行し、この時期から家庭内暴力や不登校、いじめなど多くの問題が生じてきたとしている。

さて本稿が対象とする母親の年齢は、第1子を最高年齢である50歳で産んだと仮定しても既に母親は1960年代以降の生まれである。つまり既に子育てが大きく変化したと言われる1960年代以降に生まれた子どもが、現在母親として子育てを担っているのである。なお本稿は2014年に執筆しているため、本年を基準に母親自身が1965年～1975年生まれ（現在40代）、1975年～1985年生まれ（現在30年代）、1985年～1995年生まれ（現在20代）として、生まれた年代を基準とした社会・教育的流れをみていく。

現在40代の親は1965年から1975年に生まれており、乳幼児期が高度経済成長期であったと言える。つまり核家族での子育てが開始されており、特に1971年から1974年生まれは第二次ベビーブームの年であった。子ども達の数が多く、教室数も5クラス以上である学校が多数を占めた。人口が多いため、大学入試を目指した競争が激しく知識重視の偏差値教育が行われた。中学や高校の時には、校内暴力が盛んであり、1985年を境として校内暴力が落ち着い

たが、その後第一次いじめブームや学級崩壊などが起こった。

現在30代の親は、1975年から1985年に生まれており、小中学校時代には新学力観が導入され、生活科が開始される。1996年からゆとり教育が徐々に開始された。高校時代から大学にかけて、バブル崩壊後の不景気であったが、同時にこの頃から徐々にIT社会へと移行し、パソコンやメールが日常生活の中に入ってきた。また1990年代後半からは援助交際が社会問題化し、その他にも不登校やひきこもりの数が増加した。

現在20代の親は、1985年から1995年生まれであり、小中時代である2002年には完全学校週5日制へと移行し、いわゆるゆとり教育の時代となった。携帯電話が普及しネットを媒介としたいじめも教育現場で問題として扱われるようになった。

以上20代～40代の親の育った時代について概観したが、個人の子育て観や家族観は、社会・経済動向と深く関連するとされる。例えば母親の影響を絶対視する母性神話は、戦後の高度経済成長期の良質な労働力確保のために、意図的に作られた側面があると鈴木（2004）は指摘している。このように育った年代や社会的背景が異なるため教育や育児に関しても異なる価値観が生じることは当然であるのかもしれない。

② 現在の経済的格差

次に経済的格差から生じる葛藤について先進国が共通に抱える諸課題を分析しているOECDのデータを引用しながら述べていく。近年子どもの貧困が叫ばれて久しく、内閣府の平成26年版子ども・若者白書の報告によると子どもの相対的貧困率は1990年代半ば頃からおおむね上昇傾向にあり、平成21（2009）年には15.7%となっている。子どもがいる現役世帯の相対的貧困率は14.6%であり、OECD加盟国34か国中10番目に高い。また経済的理由により就学困難と認められ就学援助を受けている小学生・中学生は、この10年間で上昇を続けており、平成24（2012）年には約155万人で、過去最高の15.6%を記録してい

る。

さらに、一人親家庭での相対的貧困率は50.8%と非常に高くOECD加盟国中最も高いことが報告されている。母子世帯の平均所得金額は213万円であり、これは同年齢の児童のいる世帯の平均所得金額(718万円)と比較すると、約3分の1にしか過ぎない。加え、近年離婚率が上昇しており、特に夫は20～24歳の離婚率が高く、妻は19歳以下の離婚率が高く若年夫婦間の経済的格差も新たな問題として浮上してきている。

一方前述の通り、第一子の母親の年齢が20代前後から50代前後と幅広いために、子育て期の家族収入に格差が生じることも容易に想像できる。中山・池田(2014)の研究では親の葛藤の中に「経済的格差」が挙がっていたが、このような子どもの貧困率は、まさに経済的格差が葛藤につながる可能性を示唆しているものである。

③ 親のパーソナリティ要因

ママ友とのトラブルや葛藤の認知には、親のパーソナリティ要因も関連すると考えられる。育児不安の研究においても、夫をはじめ周囲のサポートなど、外的要因や経済的要因とともに、母親自身のパーソナリティも育児不安の高低を決める要因として重要な要素の1つである(大森, 2010; 石・桂田, 2010; 藤村・石, 2013)。ここでは、個人のもつパーソナリティが子育て期の友人関係にどのような関連があるか、またそれは個人の適応にどのような影響を及ぼすかについて、先行研究を概観する。

成人期の友人関係を主題とした論文は数少ないが、青年期に目を向けると、友人関係と適応、幼少期の親子関係や愛着の様相と適応との関連を問題にしている研究は数多く見られる。成人期の問題は青年期から引き続いて起こっていることも多いことから、以下では、(1) 現代の友人関係の特徴、(2) 自己愛、(3) 愛着の問題の3点について、青年期および成人期の研究を概観していくこととする。

青年期の友人関係について、岡田(1995, 1999, 2002, 2007)は一連の研究において、現代青年の友

人関係の特徴として、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないよう、表面的に円滑な関係を志向したりする傾向について検討し、友人関係尺度を作成している。岡田(2007)では、現代的友人関係をもつ群と従来からの踏み込んだ人間関係を持つ群での適応を検討し、現代的友人関係を持つ群の方が適応の悪いことを見出している。このような表面的に円滑な人間関係を志向する傾向は、ママ友関係においても見られる。藤後・井梅(2013)では、ママ友のつきあい方についての尺度において、「防衛的かかわり」が他の下位尺度に比べて最も高い値を示していた。また、成人期の女性のヤマアラシ・ジレンマをとりあげた藤井(2012)は、10代から50代以上の各年代でのジレンマを検討しており、「自分が傷つくことの回避」「相手を傷つけることの回避」はともに、どの年代にも同様に見られ、特に40代では青年期よりも高い値を示していた。

一方、青年期の適応と関連して、自己愛パーソナリティに関する研究も数多くなされている。例えば小塩(1999, 2002, 2004)は、自己愛人格目録短縮版(NPI-S)を作成し、青年の自己愛傾向と友人関係、適応指標などとの関連を検討しているが、自己愛傾向のうち「優越感・有能感」「自己主張性」は適応指標と正の関連を示す一方で、「注目・賞賛欲求」では負の関連を示す傾向にあることを指摘している。小西・山田・佐藤(2008)は、大学生を対象に縦断調査を実施し、自己愛人格傾向の高い者がストレスイベントを多く経験したときに、ストレス反応を示しやすいことを見出している。清水・川邊・海塚(2008)では、大学生を対象に対人恐怖心性と自己愛傾向の2次元モデルからなる尺度を用い、5種類の性格特性と精神的健康の関連性を検討しており、「過敏特性優位型」および「誇大-過敏特性両向型」において、心理的ストレス反応が高いことを見出されている。これらの調査結果から、他者からの注目や賞賛によって満たす自己愛は精神的健康を低める傾向があることが伺われる。子育て期の女性にとって、自身の能力や有能感に加えて、子どもの能力等も母親

の自己愛に関連する要因になると考えられ、自己愛の在り方と精神的健康との関連はより複雑になることが予想される。福島・岩崎・青木・菊池（2006）は、自己愛と子どもへの攻撃性について、12歳以下の子どもを持つ父母を対象に質問紙調査を実施し、能力発揮機会の損失を子どもに帰属している群では、自己愛が高くなるほど、子どもへの攻撃行動も増えることが示された。

また青年期のパーソナリティを考える上で、愛着の問題も欠かせない。愛着スタイルと適応との関連について調べた研究では（例えば、島，2014；堀・小林，2010）、不安定な愛着スタイルが社会的適応を困難にすることが見出されている。

愛着スタイルについては、子どもを持つ母親を対象とした研究も多い。島・上嶋・小林・小原（2012）では、第1子が9ヶ月の母親を対象に、質問紙にて内的作業モデルを測定し、自子以外の乳児が映った映像を刺激として用い、3か月児と9か月児への関わりを検討している。その結果、母親自身の内的作業モデルの違いによって母親が使用する情報は異なり、“不安”が高いほど乳児に起因した情報を多く使用し、“回避”が高いほど乳児に起因した情報から注意を背ける傾向があることが示されている。田邊・米澤（2009）では、母親を対象に質問紙調査を実施し、自分の母親との関係性において安定した被養育経験を有している母親は、自分の子どもとの関係性においても受容的な関わりをしている一方で、情緒的信頼を持ってない被養育経験を有している母親は、子どもとの関係に感情的な関わりや、過保護、母子孤立といった不安定で一貫性のない関係性が見出されている。このように愛着スタイルの問題は、自身が母親になったときに再び子どもとの関係において意識されることも多く、子育て期の母親の適応にも影響が大きいと考えられる。

以上、個人のパーソナリティ要因と適応との関連について青年期の問題と絡めながら見てきたが、これらの問題は子育て期の母親にとっても、個人の適応に重要な役割を果たしているといえよう。

次に、実際の母親間のトラブルとその認知につい

て見ていくこととする。トラブルにあったママ友をどのように認知しているかについて調べた中山・池田（2014）は、ママ友関係における対人葛藤経験とパーソナリティ特性を明らかにした。この研究では、自分自身のパーソナリティとママ友関係において経験した葛藤から想起されるママ友一人のパーソナリティの評定を求め、葛藤相手をどのように認知しているかを193名の3～6歳をもつ子どもの女性を対象に分析した。具体的には、子育て中にママ友との関係を対人葛藤と認知した10項目をクラスターで分析した結果、対人葛藤の種類は、「多様」「批判」「ぐち苦痛」「格差」4つに類型化された。「批判」型とは、子どものしつけができていない、自分の子どもさえよければいいと思っているなど、常識がないと感じることを指す。「格差」型は、生活水準が違っていると指す。「ぐち苦痛」型は愚痴を聞かされることを指す。「多様」型は、10項目すべてにおいて均等にスコアされている者を指す。これらの類型化の内容と自身および相手のBig Fiveのパーソナリティ特性との関連性を明らかにした結果、批判型と格差型に特徴的な結果が示された。批判型は、トラブルが生じたママ友の調和性や誠実性を低く認知していた。格差型は、自分の誠実さを低く認識しており、ママ友との間の金銭感覚や生活水準の違いを社会的比較ゆえに羨む結果から生じていた。このようにトラブルをどのように認知するかということには、自身のパーソナリティや相手のパーソナリティ認知も絡んでいるのである。

藤後・井梅（2013）は、過去の傷つき体験の想起とママ友との対人関係を分析した。はじめにママ自身を対象関係の得点から類型化し、対人希求—自己中群、不安—回避群、バランス群、アンビバレント群に分類した。これらの各群と育児不安得点やママ友トラブルの得点を検討したところ、不安—回避群とアンビバレント群で育児不安得点とママ友トラブル得点がバランス群と対人希求群に比べて高かった。またバランス群を除く3つの群では、ママ友のトラブルをきっかけに過去の傷つき体験の想起を行っていることが明らかになった。特に回避群では、マ

ママ友とのトラブルを通して、過去の傷つき体験が想起され、それがさらに防衛的な態度を強めているという因果関係が確認された。

以上より、ママ友間での葛藤には、パーソナリティ要因が関連することが示唆された。

④子どもの特性

最後に子どもの特性と親同士の葛藤について、教育や保育分野で支援対象となっている気になる子どもについて取り上げ述べていく。いわゆる気になる子ども（発達障害やグレーゾーンの子ども）をもつ親は、健常児の親よりもストレスが高いことが明らかとなっている（本橋・沢崎, 2009）。例えば、軽度発達障害であるがゆえの多動性や衝動性、不注意などの行動特性は、子どもの性格や親の養育態度が原因であるとされ、子どもだけではなく、その親や家族が社会の中で非難や誤解を受けて孤立してしまいがちであると岩崎・海蔵寺（2009）は、指摘している。この岩崎・海蔵寺（2009）は、障害をもつ弟とその兄が兄の友達と遊んでいた事例を報告している。その内容は、言葉を話せない弟と兄の友達が物の取り合いからけんかになり、母親が制裁に入らざるをえなかった。その後、兄とその友達との関係がきまづくなり、兄が友人と遊ばなくなったというものである。この事例は子ども同士のトラブルであるが、相手の子どもがどのように家族に報告するか、またそれを相手の家族がどのように受け止めるかによって親同士の葛藤につながる可能性もある。

障害を持つ家族への差別に関して、千葉県庁HPの「障害のある人もない人も共に暮らしやすい千葉県づくり条例」に関する「障害者差別に当たると思われる事例」から子育てに関するエピソードを抽出した。その中には、「兄が知的障害者である弟が下校で迷子になったとき、近所中で弟にも障害があるのではないかと噂が広まった」「兄弟のうち、知的障害の兄一人で留守番させていたときに電話があったが、一方的に切ったりしたため相手が気を悪くした。母が帰宅後に連絡があり、兄には知的に障害があること等を説明したが、許してもらえなかつ

た」「お母さん、忙しいのは分かりますが…」などと、障害児の親は障害児の親らしく、子育てをしていないと、言われているような気がする」などが挙げられていた。子どもの特性を起因としたトラブルによって、あらぬ噂が親同士の間で広まったり、それをきっかけに親同士に葛藤が生じ関係性が悪化したりすることもありうるのである。

4. 子どもの優劣を通した親同士の関係

親同士の葛藤やそれが生じる原因について概観してきたが、子どもの優劣が表面化しやすい場面ではその葛藤が増幅しやすい。2013年の女性セブン4月号では、ママの中の序列という「ママカースト」について紹介しており、夫の職業や収入、子どものルックス、学力、運動神経などで格差が生じると述べられている。例えば地域の野球チームでは「エースで4番」のママが格上であるとされ、子どもの競技レベルの優劣が親同士の人間関係に影響を及ぼす可能性を述べられている。これらはあくまでも大衆紙の指摘にすぎないが、家族のことにしても、子どものことにしても優劣が明確であるものに関しては、嫉妬という負の感情が生じやすく、それが親同士の関係に影響する可能性は十分にありうる。スクールカースト（鈴木, 2012）の研究では、学校内での子ども間の格差の要因として、クラスを中心か否か、先生からの評価、異性からの評価、運動神経、部活の種類、容姿、恋人の有無、成績などが挙げられている。この中で親個人ではなく親同士という集団で子どもの優劣を目の当たりにする機会が、子どもの習い事場面、学校の行事や運動部の試合などであろう。

未就学児と小学生の親600名対象に行われた調査によると、小学生以下の子どもの習い事でもっとも多いのは、水泳（35.9%）、次点がピアノ・音楽教室（23.5%）、三位は英語・英会話（22.6%）、この後にリトミック・体操（21.4%）、学習塾・幼児教室（12.4%）が続く（リクルートライフスタイル, 2013）。特に幼少期の習い事の多くは親の送迎が必要な場合もあり、子どもが習い事をしている時間、親同士の交流の機会となる。サッカー（同調査では6位）、バレ

エ（8位）、ダンス（9位）も人気の習い事であるが、このような同じ時間に集団で実施される習い事では、親の待ち時間が同じになるために必然的に親集団で子どものパフォーマンスを見る機会が生じやすく子どもの能力差が葛藤へとつながる可能性が高い。

また子どもの能力に関する嫉妬のみではなく、親の貢献感や負担感の不平等感がさらに問題を複雑にしている。例えば、少年団を代表とする地域スポーツでは、そもそも運営自体に親の協力が不可欠であり、練習時の当番や試合の付添など、多くの時間を親同士で共有することとなる。つまりサービスの受け手としての親という位置づけではなく、主体的な関わりが求められ、親同士が協力してチーム運営などの目的を達成しないといけないのである。このような状況では、親の主体的な関わり（チームへの貢献度など）において平等性を保つことの難しさが生じる。また、チームが勝利を目指した際には、親の主体的な関わりと自分の子どもの活躍の機会（例：試合に出ることや代表選手に選ばれること）のバランスを保つことも困難となる。例えば、親は一生懸命チーム当番やチームの車出しなどを行っているのにも関わらず、自分の子どもの活躍の機会が少なく、さほどチームに貢献をしていない親の子どもがチームの主力選手として活躍する機会を目の当たりにすることがある。こうした状況に対する不公平感も親同士の人間関係に軋轢を生み出す可能性がある。

成人期の対人関係のトラブルを扱った井梅・藤後（2014）は、子どものスポーツの習い事場面で、母親同士のトラブルを経験したことがある人が一定数いることを報告している。習い事は預ければ済む場合も多いが、地域スポーツの活動はより保護者同士の密な関係が求められる。そのため、習い事以上に地域スポーツ場面において保護者たちは否定的な経験をしている可能性が高い。地域スポーツに参加している子どもがいる保護者を対象に行われた大橋・井梅・藤後（2015）の調査では、子どものスポーツ経験を通して親が嬉しかったこととして親同士の交流を挙げた者は2%弱しかいなかったが、親が傷ついたこととして親同士の関係を挙げた者は約10%いた

ことが報告されており、地域スポーツは親の交流場面とともに葛藤場面にもなりうることが示唆された。

5. 今後の課題

本研究では、子育て期の友人関係として、親同士の葛藤場面を中心に取り上げ、その規定要因について述べてきた。そして最後に親同士の葛藤が表面化しやすい場面の一つとして、地域スポーツを取り巻く親同士の関係について考察した。その結果、子どもの能力の優劣が親同士の葛藤に影響することは示唆されたが、実際にどのような影響を与えているのかという実証研究は未だ見当たらない。また、親同士の関係が子ども同士の関係に影響する可能性も高く、親同士の視点を取り入れたさらなる実証研究がもとめられる。

本研究は平成26～28年度日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽研究（代表：藤後悦子 課題番号・26590166）の助成を受けて行われた。

引用文献

- ベネッセ未来教育センター（2005）. いまどきのお母さん—母親たちのコミュニケーション事情—モノグラフ・小学生ナウ, 24, 2.
<http://benesse.jp/berd/center/open/syo/view21/2005/01/s01main.html>>（2014年6月15日）
- キャリア・ママ（2011）.
<http://www.c-mam.co.jp/shufu-labo/research/data/110501.html?press-pr>（2014年5月15日）
- 千葉県 条例制定当時に寄せられた「障害者差別に当たると思われる事例」（その他）
<http://www.pref.chiba.lg.jp/shoufuku/iken/h17/sabetsu/sonohoka.html><2014年10月14日>
- 藤井恭子（2012）. 女性の友人関係におけるヤマアラシ・ジレンマの生涯発達 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 313.
- 藤村和久・石曉玲（2013）. 保育者特性検査の妥当化II：育児不安、自己観およびYG性格検査との関連性 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 3, 63-71.
- 福島治・岩崎浩三・青木慎一郎・菊池潤考（2006）. 親の自己愛と子への攻撃：自己の不遇を子に帰すとき 社会心理学研究, 22, 1-11.

- 堀匡・小林丈真(2010). 大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連 学校メンタルヘルス, 13, 41-48.
- 井梅由美子・藤後悦子(2014). 成人期女性の対人関係のトラブルとストレス: 子育て期の子どもを介した対人関係に着目して 東京未来大学研究紀要, 7, 177-187.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子(2009). 軽度発達障害児をもつ母親への支援 流通科学大学論集人間・社会・自然編, 22, 1, 43-53.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪(2008). 自己愛人格傾向についての素因-ストレスモデルによる検討 パーソナリティ研究, 17, 29-38.
- 厚生労働省(2013). 平成24年(2012)人口動態統計(確定数)の概況
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakuteil2/dl/08_h4.pdf<2014年10月14日>
- 三沢直子(2009). 働くママ専業ママ 緑書房
- 本橋順子・沢崎真史(2009). 思春期の軽度発達障害児を持つ母親のストレスに関する研究 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 8.
- 内閣府(2014). 平成26年版子ども・若者白書(全体版)
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_03.html<2014年10月14日>
- 中山満子・池田曜子(2014). ママ友関係における対人葛藤経験とパーソナリティ特性との関連性 パーソナリティ研究, 22, 285-288.
- 大橋恵・井梅由美子・藤後悦子(2015). 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき-自由記述法による検討-東京未来大学紀要, 8, 27-37.
- 岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努(1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 岡田努(2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 大森彩子(2010). 母親の育児不安およびパーソナリティと有効な子育て支援の関連 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 16, 173-188.
- 小塩真司(1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司(2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み-対人関係と適応 友人によるイメージ評定からみた特徴- 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司(2004). 自己愛傾向と大学生生活不安の関連 人文学部研究論集, 12, 67-78.
- リクルートライフスタイル(2013). ケイコとマネーブ 子供の習い事アンケート2013 <http://www.keikotomanabunet/kids/ranking/><2014年11月5日>
- 石曉玲・桂田恵美子(2010). 保育園児を持つ母親のディストレス: 相互協調性・相互独立性およびソーシャルサポートとの関連 発達心理学研究, 21, 138-146.
- 島義弘・上嶋菜摘・小林邦江・小原倫子(2012). 母子相互作用において母親が使用する情報: 内的作業モデルの影響 発達心理学研究, 23, 36-43.
- 島義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか: 内的作業モデルの媒介効果 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎(2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16, 350-362.
- 鈴木翔(2012). 教室内(スクール)カースト 光文社新書 光文社
- 鈴木敏子(2004). 21世紀家族の展望 岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行(監修) 金田利子 齋藤政子(編著) 家族援助を問い直す 同文書院 15-32.
- 田邊恭子・米澤好史(2009). 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達: 母親像に着目した子育て支援への提案 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 19-28.
- 藤後悦子・大橋恵・岩崎智史(2013). 子育て中の母親のSC利用イメージと対象者別相談ニーズとの関連-場面想定法を用いて- コミュニティ心理学会第16回大会発表論文集, 106-107.
- 藤後悦子・井梅由美子(2013). 過去の対人関係における傷つき体験と現在の「ママ友」関係との関連性 日本心理学会第77回大会論文集, 437.
- 若本純子(2001). 現代日本における成人期的人格発達の検討: 成人期に特有な意識変化と日本的人間関係に着目して 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 226.

(とうご えつこ、いうめ ゆみこ、

おおはし めぐみ、かわた ゆうじろう)